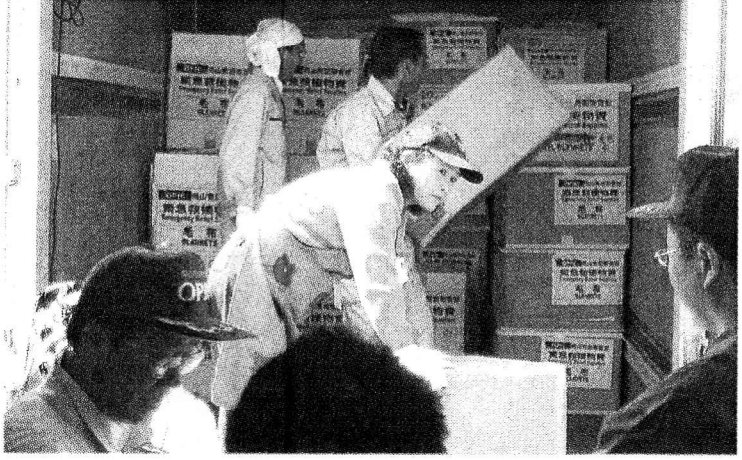
ももたろう国際救援隊（見）発足1年

公設国際貢献大学校（新見市哲多町田渕）が組織する「ももたろう国際救援隊」が二〇〇四年十二月に発足し、一年が経過した。被災地への派遣活動や救援物資提供を手助けする市民参加型のボランティアだ。国内外の大地震や津波、台風被害に欠かせない人道支援の輪は、草の根の市民にも広がりを見せている。（赤井康浩）



パキスタンへの救援物資をトラックに詰め込む「ももたろう国際救援隊」メンバーら＝昨年10月

「市民参加型」で活躍

物資搬出 仕分け

後方要員育成に力

われら地球市民

「パキスタン地震で、がれきのそばにうずくまった子どもをテレビで見たとき、岡山空襲に逃げまどっていた幼い自分を思い出した。とにかく現地へ毛布を届けたかった」と吉岡親子さん（六六）＝倉敷市西坂。昨年十月、「ももたろう国際救援隊」として、メンバーの四人と大学校が進めるパキスタン地震の被災者支援活動に加わった。

吉岡さんらの役割は、岡山空港内（岡山市日応寺）にある岡山県の救援物資備蓄センターから、新見市の大学校までの物資輸送。毛布やシュラフ（寝袋）、貯水用タンクなど四百点近くを汗だくになってトラックに詰め込み移送した。物資は大学校が保管する医療品とともに用途別に仕分けされ、後日同国の政府関連NGOに搬送された。

岡山発

「ももたろう国際救援隊」は岡山発の国際救援活動推進を狙いに、大学校内に発足。隊員は、県が大学校で行った「国際救援活動要員養成講座」の修了生で、希望した会社員や主婦、学生、公務員ら二十～七十歳代の約三十人が登録している。

任務は「医療技術者」として現地で診察や看護を行ったり、物資配布や避難誘導する「救援コーディネーター」など幅広い。中でも、大学校が最も力を入れるのが「ロジスティシャン」と呼ばれる後方支援要員の育成。大学校の要請に応じて参加し、物資搬出や仕分けを手伝う。

二〇〇四年十二月のスマトラ沖地震でも、発足直後の隊員三人が、県の救援物資備蓄センターから千点を超える物資を大学校に移送した。物資はその後、大学校スタッフが被害の大きかったインドネシア・アチェ地区に無事届けた。

見えない親切

「ももたろう国際救援隊」は昨年九月上旬の台風14号禍でも活躍。被害が大きかった宮崎市の社会福祉協議会と協議し、避難生活で紙おむつや生理用品、ごみ袋などが不足していることを知り、現地へ物資を運んだ。

大学校スタッフと交代で専用車を運転、片道八時間かけ被災地へ物資を届けた船越長平さん（五四）＝岡山県早島町＝は「岡山はあまり災害がないが、現地の大変さがよく分かった。必要なものを素早く届けることができ本当に良かった」と振り返る。

大学校の丸山尚人救援室長は「国際協力や被災地支援と聞くと、海外に行くことばかりを想像するが、どの活動も〝見えない親切〟があるからこそ成り立つ。人道支援には、国内での市民ボランティアの果たす役割が大きいことを知ってほしい」と話している。

ズーム

公設国際貢献大学校　国際医療ボランティアAMDAグループが運営。途上国や紛争地、国内外の災害被災地で人道支援活動に携わる一方、国際貢献のできる人材育成も積極的に手掛ける。新見市で唯一の産婦人科を備える「国際貢献大学校メディカルクリニック」（同市哲多町本郷）や老人保健施設も運営する。